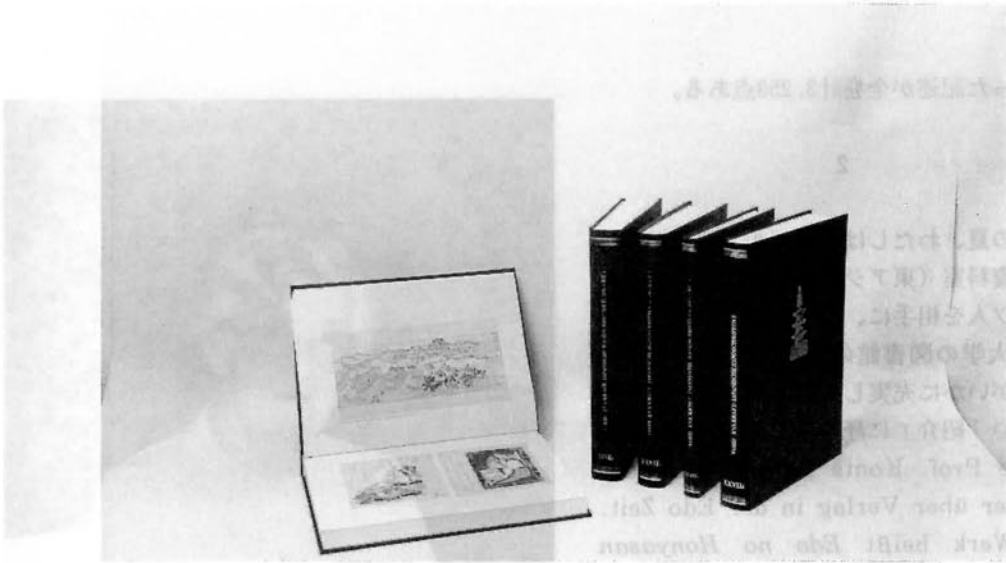


# バイエルン国立図書館

教養部助教授 高坂史朗



クラフト博士編集の『ドイツ日本語文献蔵書目録』全5巻

## 1

Japanese Handschriften und traditionelle Drucke aus der Zeit vor 1868 in München という書物がある。『ミュンヘンにおける1868年以前の日本の写本および伝統的な刊行本』とでも直訳しようか、ともかく、ドイツのミュンヘンにあるバイエルン国立図書館、市立図書館、人形劇場博物館、そして民族学博物館の『日本語文献蔵書目録』である。バイエルン国立図書館に勤務してい

た東洋資料室のエヴァ・クラフトさんが編集した本である。クラフトさんのこの編集シリーズは、単にミュンヘンにのみとどまってはいない。第1巻がベルリンのプロイセン文化財団所有文献、第2巻がミュンヘンのこの書、第3巻ボン、ブレーメン、ハンブルク、ケルン、第4巻ボーフム、そして、第5巻ミュンヘンの増補版と全部で5冊である。ドイツの図書館、博物館にある日本語文献のすべてを網羅していると言ってもよい。1例を示そう。

## 都名所圖會

*Verfasser:* Akizato Ritō (Akizato Shōseki)*Illustrator:* Takehara Shunchōsai (Shunchōsai Takehara Nobushige)*Holzschneider:* Nagashima Rokuemon, Yamamoto Chōzaemon, Izawa Matajirō, Fujie Kiheiji u. Kishimoto Hikoemon*Verleger:* Kyōto, Yoshinoya Tamehachi (1)*Druck:* An'ei 9 [1780]*Beschreibung:* 6 Kap 6 Bde; (44)+51+84+67+76+51,(2) Blatt (Bd 1 gezählt 46 Blatt, aber Zählprung 6/8); 25,9×18,2 cm; Texttitel; Vorwort und Verfassernachwort An'ei 9 [1780]*Bilder:* zahlreiche Sumizuri*Einband:* hellblau, abgerieben, keine Titelstreifen

Nb: Illustrierter Führer zu den Sehenswürdigkeiten in und um die Kaiserstadt Kyōto. KS bringt Ausgaben von An'ei 9 [1780] und Tenmei 6 [1786].

KS 7/581/4 (Chishi); BSB 252; Berlin 499ff.; E 244; Toda 334; Edgren 527

こういった記述が全巻計3, 253点ある。

## 2

—昨年の夏、わたしはバイエルン国立図書館の東洋資料室(東アジア課)の一室で、3人のドイツ人を相手に、たどたどしいドイツ語で近畿大学の図書館の蔵書、近畿大学のスタッフがいかにかに充実しているか、という不可能に近い「紹介」に汗を流していた。“Mein Kollege Prof. Konta ist ein führender Forscher über Verlag in der Edo Zeit. Sein Werk heißt *Edo no Honyasan* d. h. Buchhandlung in Edo.”「たとえば、同僚の今田教授は江戸時代の出版業の研究者としては指導的な位置にある。彼の作品は『江戸の本屋さん』といい」と。するとそこにいた一人の白髪の女性が「今田先生の江戸の本屋さんでしょう。わたくし読みました」と流れるような日本語で話し出したのである。私はその日本語の上手さに、たちまちドイツ語で話す緊張感がとけてしまうと同時に、その語られた内容に戸惑いを覚えたのである。「今田洋三氏の本をドイツ人が読んでいるはずがない。今田と書いてこんたと読めるはずがない、いや Konta と発音した音を今田と理解しているはずがない…。しかし



エヴァ・クラフト博士、1994年7月26日バイエルン国立図書館東洋資料室にて 筆者撮影

この日本語の上手さは並の能力ではない。」とっさにこれらの思いがドッとあふれ出て、同時に汗が滝のように流れ出した。その白髪の女性がエヴァ・クラフトさんである。その時、私はバイエルン国立図書館の一室で、ミュンヘン大学東洋文化研究所所長のヨハネス・ラウベ教授と、国立図書館東洋室主任のアルフォンス・デュファイ博士と1995年にミュンヘンで行おうとしている、共同企画「江戸時代名所図展覧会」の協議に赴いていたのである。

ところで、そもそもこの企画が生み出されたのは、平成4年11月に、当時、学術振興会の招きで京都に滞在中だったラウベ教授に近畿大学で教養部主催の講演会をお願いしたことによる。講演会の後、ラウベ教授を囲んで懇親会を催したが、その席で近畿大学とミュンヘン大学とのより一層の交流を深めたいとの綱澤満昭教養部長とラウベ教授との意見交換が行われた。その1つの案が「名所図会」の展示会であった。近畿大学には中央図書館に「島本文庫」を中心とした江戸時代の「名所図会」がおおよそ百点ほどある。そして、その頃今田教授を中心に数名の教員の共同研究がなされていた。この「名所図会」の案は提示されたいくつかのうちの1つであったが、ラウベ教授がドイツ帰国後、関係する会議で提示するや、この展示企画が一気に浮上した。そして、それに最も積極的な賛意を示したのがデュファイ氏であった。

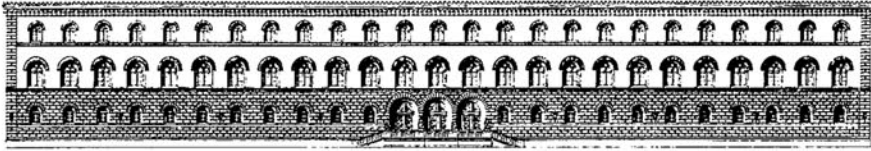
さて、私も呑気なもので、近畿大学の中央図書館が大学図書館として頭抜けて立派であるとまでは思っていなかったが、図書館が自慢する「島本文庫」も、それなりに価値があるものと思っていた。そこでその時、国立図書館のその部屋で近畿大学のコレクションを話し始めた。するとクラフトさんは、私の差し出したリストに、みるみる赤ペンでチェックをして行く。傍らで見ている私はまたまた汗が吹き出した。近畿大学の所蔵の2/3はバイエルン国立図書館がすでに所蔵しているのである。私は思わず「これでは近畿大学の出

る幕がない」とつぶやいてしまった。

### 3

バイエルン国立図書館は、ベルリンの国立図書館、フランクフルトのドイチェ・ビブリオテークと並んでドイツ連邦共和国の中央図書館の機能をもっている。1558年、バイエルン侯アルプレヒト5世が宮廷図書館として創設、アウグスブルクの豪商フッガーなどの協力を得て、イタリア、スペイン、オランダなど、ヨーロッパ全域から写本、インクナブラ（グーテンベルクの印刷術の発明から15世紀末までの刊行物）の収集を行った。1663年以來、バイエルン選帝侯国の義務納本制を敷いて、図書の収集に努めている。また、1807年以降バイエルン科学アカデミーの図書館でもある。このように発展した同図書館の蔵書量は1992年の終りで、6286255冊、逐次刊行物38243点のドイツ最大規模の図書館である。とくに創設以来の写本コレクションは、ドイツの歴史の展開によって、すなわち、1773年のイエズス会の解散、1803年の神聖ローマ帝国崩壊による教会諸侯領の世俗化、1806年の帝国都市アウグスブルク、ニュルンベルク、レーゲンスブルクのバイエルン編入などによって、増え続け、3万点にも達した。現在71505点が登録されている。

さて、私が入り出した東洋資料室（東アジア課）は国立図書館の2階にあり、9の部局（購入課、目録課、閲覧課、写本・稀観本課、音楽課、東ヨーロッパ課、オリエント課、東アジア課、地図課）のうちの1つである。現在の蔵書は中国関係47266点、日本33058点（70362冊）、朝鮮3383点、タイ320点、ベトナム275点である。主任デュファイ氏の言葉を引こう。「バイエルン国立図書館はドイツ文化圏の中で、東アジアの古典収集では最大の地位を占めている。これはまず最初に中国と日本への宣教師の寄贈に始まる。（最も古い物は1618年にさかのぼる。）さらに18世紀後半の大量購入、第1次、第2次大戦



## BAYERISCHE STAATSBIBLIOTHEK

後、そして近年の20年間に、日本と朝鮮文献の体系的な古書購入によっているのである。」

日本語文献の中で出色なものを拾って見ると、8世紀(770年以前と思われる)の『百万塔陀羅尼』、平安時代の『大般若波羅蜜多經』の巻物、12世紀、恵什『圖像抄両界仏』、恵什『圖像抄普賢延命菩薩』、イエズス会の版本として知られる16世紀の『ぎやどべかどる』、嵯峨本と呼ばれる古活字版の謡曲『鸚鵡小町』(1615年)、観世忠親の書による謡曲木版本『和志満』(1620年)、小野阿通(1558-1631)の手によるといわれる『源氏物語』の写本、『寛永御行幸記』(1626年)、『江戸方角安見圖』(1680年)など枚挙に暇がない。

もちろん先の『蔵書目録』にはこれらすべてが記載されている。

### 4

昨年(1995年)の夏はことのほか猛暑であった。それはヨーロッパも同じで札幌より緯度の高いミュンヘンでも40度近い気温であった。その暑さのなか、今田教授と私はバイエルン国立図書館を訪問した。95年の展示会の展示品決定とそれに関わるいくつかの問題点を協議するためである。(私たちのミュンヘン出張は、ほかに重要な課題もあった。展示会と同時に開催される全ドイツ語圏の「日本学会」での特別企画のシンポジウムについての討議と、それを契機としてのミュンヘン大学と近畿大学との姉妹大学締結の準備交渉である。

それらに関しては別の機会に触れたい。) 10日間の滞在日程の半分以上をバイエルン国立図書館の古書検索と打ち合わせに費やした。ラウベ教授、デュファイ主任、そして今はもう囑託の地位にあり、体調も壊して休養を取っていたクラフトさんも加わって、来年へ向けての展示会の準備である。

国立図書館を訪問する前、ラウベ教授は「先日、学生を連れて古書をみせてもらいに行ったのだが、デュファイ氏はどうも貴重本を見せたがらない」と危惧する言葉が発せられたのだが、訪問すると、デュファイ氏は今田氏と初対面ながら一言二言会話を交わせるや、次から次へと貴重書の山を築き、今田氏という専門家への敬意とともに、自分たち東洋資料室の収集の努力を認めてくれる人物を得た喜びが伺われた。

5名の者が討議した展示会の構想は次のようなものである。

### 江戸時代名所図展覧会

日時、1995年10月9日-11月15日。

場所、ミュンヘン大学大学本館の北ホール。  
展示物はテーマを設定して陳列されるが、そのテーマは

- 1 社会的役割-日常生活の諸相  
天皇 公家 武家 神官・僧侶 農民・漁民・獵師 職人 商人
- 2 通過儀礼と死生観-人生の諸相-  
前生 子ども 男性と女性 老人 病と死
- 3 異質な空間-非日常的な世界-  
名所 聖地 くるわ 芝居 異界
- 4 異質な時間-一年中行事と聖なる経験

